

く有之候。然る上は諸大名参勤の延引被致候内、不慮の儀も有之間敷ものにも無御座候。一城の領主籠城は日本國中の騒動に罷成候。既に先年天草五萬石の土民籠城仕候さへ、西九ヶ國の騒動、江戸にては將軍御發駕と申程の取沙汰に成候。増て一城の領主にては日本國中の騒動、是偏に細田殿欲心より事起り候。先年土屋殿御老中の時分、金銀吹替の事内意申候處以の外不興、後藤も二言と申出す事難成候。是等の趣被聞召上、天下の御爲諸人の難儀、私一命と引替被下置候は、難有仕合可奉存候。以上。

右浪人姓名無之残念成事に候。御取擧は無之、終に正金銀重て吹改、今通用の悪金銀に罷成候。享保の初年正眞金銀に御吹改被成、二十年に不滿内、又々如斯罷成候儀、誠可惜事也。

一、大清國の事情

享保年中薩摩侯へ御尋に付、老中戸田山城守迄薩州より言上紙面の内、拔書如左。

琉球人へ相尋可申上旨、被仰渡候に付承届候。大清政務の趣。

一、中華の仕置六箇條御座候。去戊子年唐へ相渡候琉球人、板行仕持歸候六諭衍義と申書物一冊御座候に付差上申候。右の内諸事仕置式の儀相見え申候。

一、琉球人使者唐へ参候儀は、福州へ参候て琉球館へ上り、夫より北京へ参候。水陸の路日本道程にて、八百八拾里餘の圖りに御座候。北京にて宿は館又は寺々に罷在候。

一、中華の儀城廻り指渡、大舩日本道七八里餘も可有御座哉と存候。城も有之候て門數大分有之候。平地の城にて御座候。城圍の内に町屋人店多く、三公六卿の居宅寺院も御座候。

一、村々里々に學問所有之、人々精出し相勤申候。學問の功に寄官人に罷成候故、何者にても別て精出し申候。

一、武藝も無油斷致稽古候様子に御座候。

一、國々より諸侯都へ交代の儀は無之候。官人を國々へ召置、其官人國を治申候由。三公六卿は左の通今も有之、城内に居宅有之候。

一、山川・草木・湖水段々御座候。川は大川にて日本近江の湖水を見申様成所も有之候。又は狭き所も御座候。岡は大

形岩にて御座候。日本の山より古く見え申候。唐繪山水の様子に相見え候。

一、合戦の内習北京にて見不申候。福州の城東南の門外に、日本道一里廻り程平地圍、其内にてならし候節見申候。八色の旗を以て士卒を分け、鐵炮を持ち玉を不入打申候。

五人宛組合候由。尤鎗・長刀の取さばき有之、鼓金にて進退仕候儀、一ヶ月に幾日と式日有之由。此儀國々所々同然稽古有之由。

一、衣類の儀は輕者迄純子・縷子の類着用仕候も御座候。皆結構に相見え候。尤身上次第に候へば、見苦敷も有之候。

一、儉約の儀は成程有之様に見及候。奢候儀は且て見及不申候。銀子を殊の外望候事にて、一厘一毛の事も六敷申事に御座候。

一、具足は杉原紙の厚に鐵を延、くさりにて結候て、其上を木綿にて包申具足にて、紗綾を以て繪を入たる具足も有之由に御座候。

一、諸寺院へ参詣の人も有之候。女は参不申候。奉加も心次第に仕事に御座候。

一、服忌儒方は三年慎候由。佛方は七々の數に行ひ申由に御座候。

一、諸役人の出仕は明け六時罷出、八時分に歸宿仕候由に御座候。

一、福州にて咄承候に、切支丹宗門信仰の者有之、中庸を書直し候。其科に依て仕置に逢候由。是は聖人孔子の道を直し候科と承候。

右は去年参府仕候琉球人の内、唐へ相渡り候者に相尋候處、如此申に付此段申上候。以上。

一、雲霧に途方を失へる時外二條
深山幽谷等にて俄に雲霧起り、失途方候時、蠶を燒候へば昏霧晴ると云。薩州霧嶋山には、毎々昏霧起りて行先みえぬ事あり。其時白粲をまき散しぬれば、昏霧晴ると云も此類也と云。

葬地にして人を火化する時、臭氣人家に至る事あり。其時赤小豆を燒ば臭氣止と云。不潔の臭氣も同然と云。

極寒の節筆硯の水凍りて難用時、土用水を貯置て少々硯に入れば不凍と云。齋藤長八郎傳授也。御右筆皆貯ふと也。